

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2010年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学 研究科	日本文学 専攻	
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏 名			
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程二年		塩川 和広 印			
指導教員	所属・職名		氏 名			
	立教大学文学部・教授		小峯 和明 印			
自然・人文・社会の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同 名
研究課題名	「お伽草子・異類物における擬人化の手法とパロディ構造～『かくれさと』を中心に」					
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏 名			
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程二年		塩川 和広			
研究期間	2010年度					
研究経費	200千円					

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の目的は、「異類」と呼ばれる人ならざる存在、本研究では特に動物と神仏について、いかにして、またどのような目的を持って擬人化されて描かれてきたのかを解きほぐし、さらにパロディ存在としての異類の意義を考察するものである。

具体的には、神仏や擬人化されたさまざまな動物たちが特徴的に描かれる『隠れ里』という作品について、伝本の整理を中心に基礎的な作業を行い、そこから『隠れ里』を手がかりとして、動物の擬人化という表現がどのように変化していったのか、また、福の神がパロディ化されていく過程について、他作品との関わりから考察を行った。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[異類物] [パロディ] [『隠れ里』]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本文の内容から近世前期に成立したと見られる『隠れ里』は、お伽草子と呼ばれる作品群の中でも最末期に位置する作品である。本作は島津久基『近古小説新纂』に翻刻・研究されて以来、近年その物語舞台について論じられたことを除けば、単独で取り扱われることはほとんどなく、『鼠の草子』のように鼠を扱った作品を論じる一つの例証という扱いが多かった。しかし、大黒天・恵比寿などの福神や、様々な動物が入り乱れる本作は、異類物という分野の中でも特徴的な位置を占めており、さらに恵比寿と大黒天の喧嘩というパロディ的なモチーフを始め、先行する作品の影響など、『隠れ里』には論じるべき点が少なからず認められる。そこで、本研究は以下の点を中心に行った。

① 『隠れ里』の基礎研究

従来ほとんど行われてこなかった『隠れ里』の基礎研究として、伝本の整理と成立の背景を探ることを目的とした。

具体的には、形態の異なる四つの伝本、すなわち東京大学国文学研究室蔵本、都立中央図書館特別文庫室加賀文庫蔵本、慶應義塾図書館蔵本、早稲田大学図書館蔵本について、本文から読み取れる地理的な条件、七福神に対する認識、本文の校異、挿絵の比較から、近世前期、一七世紀中頃以降の成立であること。また都立中央図書館特別文庫室加賀文庫蔵本が最も古体を有しており、おそらくはこれを親本として書写されたものが残りの三本であろうとの結論を得た。また、早稲田大学図書館蔵本については、挿絵に他伝本には見られない鷹が描かれている点、本文の冒頭と結末が削られている点から、恵比寿と大黒天の争いというパロディ的なモチーフが強調されているということが確認できた。近世前期の作品には、男が異類の世界に迷い込み、夢から目覚めて物語が結ばれる『変化あらそひ』や、合戦描写よりも勢揃えや論争に力点が置かれ、異類の酒宴から目が覚めて物語が結ばれる『鶏鼠物語』など、本作と似た構造を持つものが見受けられる。

② 動物擬人化の異相

『隠れ里』における擬人図像に目を向けてみると、擬人化される動物とされない動物があり、その区分はどの諸本にも共通している。擬人化されている動物にも、その種類によって擬人化の表現に差がある。という二つの特徴が見られた。

前者について、『隠れ里』において擬人化される動物は鼠、狛犬、蝙蝠、魚介類であり、擬人化されない動物は馬、鷹、鰐、象、猫である。こうした区別が為される理由について、『隠れ里』での諸動物の扱いを見てみると、擬人化されていない動物たちは、人間社会におけるそれぞれの動物たちの役割がそのまま割り当てられているといえる。また、早くは柳田国男(「動物と人」『口承文芸史考』中央公論社 一九四七年)らによってすでに指摘されていることだが、異類物の主役となるのは特定の異類のみであるとされ、『隠れ里』での擬人化の可否の区分は『鼠の草子』『鶏鼠物語』『弥兵衛鼠』『大黒舞』『かみよ物語』など他作品と見比べてみても、概ね適用できるようである。より多くの作品を今後検証していく必要があるが、対象となる動物の人間社会における扱いや、人間との生活領域の関わり方によって擬人化の可否が決定されていると考えることが出来る。また擬人化される動物について、場面によってその姿が擬人化されずに描かれることがあることについて、田口文哉氏の「擬人化」の図像学、その物語表現の可能性について--御伽草子『弥兵衛鼠』(慶應義塾図書館蔵)を主たる対象として(『美術史』五五 二〇〇六年三月)に、その動物が取る行動によって擬人化図像の描き分けがなされていると指摘があるが、今回の研究結果から、そこには新たに人間の視線を加えることが出来、人間社会において食料、吉兆、害悪など、その動物に対する認識に沿う役割をあてられている場合、擬人化されずに描かれる事が多いと言うことが確認できた。

後者については、既に挙げた他作品の検討も含め、魚介類が特殊な擬人化を行われている点が指摘できる。具体的には、魚介類は頭部や手足が異類の形である他の動物たちと異なり、魚介類を被った異類ないし人間の姿で描かれる。これは面を被って役を演じる能狂言や芝居の影響を受けているのだと推測され、『大黒舞』『魚太平記』など魚介類が擬人化

研究成果の概要 つづき

される作品から、魚介類を被った異類の姿の方が古いと考えられるが、おおよそ同じ時期に異なる二種の擬人化図像が描かれていたことから、『隠れ里』が成立した一七世紀半ばはこうした図容の変化が起こっていた過渡期であったと考えられる。

これらの①②の成果から、従来閉却視されてきた『隠れ里』が、近世初期における福神信仰と、動物の擬人化という表現を考える上で重要な場所に位置していたと確認できた。

以上①②の研究成果は、学会における口頭発表（→「『隠れ里』における擬人化の方法」2010年度立教大学日本文学大会 2010年7月3日（土）於立教大学池袋キャンパス）、特に①については論文（「『隠れ里』の研究 ～諸本を中心に」（『立教大学日本文学』105号 2011年1月 186～204ページ）にまとめて発表した。

③『隠れ里』の福神描写

『隠れ里』の福神描写に注目し、他作品との関わりから、近世前期における福神に関する人々の認識の変容について考察した。

具体的には、まずは恵比寿と同体とされる蛭子が、『隠れ里』では伊弉諾・伊弉冉尊の第四子とされる点、大黒天と帝釈天が同体とされている点、仲裁者が布袋とされている点を取り上げ、『隠れ里』における福神描写の特徴について考察した。

恵比寿については『隠れ里』と同じ記述を持つものは、現在確認できている所では『類従神祇本源』のみで、それが参考にしたと言われる『釈日本紀』を含め、『日本書紀』や中世の注釈書、『隠れ里』と同時代の『仏像図彙』などは、蛭子を伊弉諾・伊弉冉尊の第三子としており、『隠れ里』に記述は一般的ではなかったと考えられる。大黒天については『大黒天神法』やそれを引用する『覚禅鈔』『阿婆縛抄』、『溪嵐拾葉集』など中世の修法書では摩訶伽羅天すなわち大自在天と結びつけられており、こちらも一般的ではない認識のもとに記された記述であるといえる。しかし、これらの記述は全く根拠がないわけではなく、その他の大部分の記述については狂言「蛭子毘沙門」、「夷大黒」、『大黒舞』などの同時代の芸能や作品も含めて、先ほどあげた注釈書や修法書などの記述に則ったものであり、『隠れ里』における福神の描写は、狂言等の芸能や修法書、先行する物語作品群における福神の描写と重なる点が多いものの、典型的な福神像からは外れる表現もなされ、福の神のパロディ化が行われていることが確認できた。

また、やや先行して成立したと見られる『弥兵衛鼠』『大黒舞』『梅津長者物語』との関連から、真下美弥子氏が「福神来訪の物語の方法 お伽草子『大黒舞』『梅津長者物語』を中心に」（『立命館文学』五五二号 一九九八年一月）で指摘するように福の神の招来を期待するべく福神遊びが描かれる予祝性の高い作品が急速に当時の人々の間に浸透したという点、さらに『隠れ里』で福神がパロディ化されるに足る、影向して福德を授けるといふ福神の姿が広く認識されていた点が確認された。こうした福神に対する認識は、物語においてのみだけでなく、文化的な動きとしてあったことが狂言や絵画との関わりから想像される。さらにこうした福德授与神としての福神や、それがもたらす富貴への願望が、『隠れ里』においてはパロディ化されて異類物によく見られる物語構造の中に取り込まれている。これは福神が信仰の対象から人間と近い卑俗な存在へと引きずり下ろされたと見ることが出来、いわば神仏の擬人化と言える状況にあったといえる。

福神の信仰が広がり福德授与神としての認識を深めるにとどまらず、卑俗な存在としてパロディ化される下地をも生み出した。『隠れ里』の福神描写は、一七世紀半ばという時代にあって、人々の福神に対する新たな信仰を生み出していく契機とも成り得るものであったと言えよう。

以上③の成果は伝承文学研究会第385回東京例会（2011年1月23日（土）於学習院女子大学）における口頭発表「『隠れ里』の福神描写～パロディ化される神」で発表した。以上が2010年度の主な研究成果である。

を記入した調書（A4縦型横書き1枚・自由様式）を添付すること。

（様式3）

立教SFR－院生－報告

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

- ①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
- ②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
- ④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

① 塩川和広「『隠れ里』の研究 ～諸本を中心に」（『立教大学日本文学』105号 2011年1月 186～204ページ）

④ 口頭発表 「『隠れ里』における擬人化の方法」 2010年度立教大学日本文学大会 2010年7月3日（土）於立教大学池袋キャンパス

口頭発表 「『隠れ里』の福神描写 ～パロディ化される神」 伝承文学研究会第385回東京例会 2011年1月23日（土）於学習院女子大学